

第6章

水に関する自発的な活動等

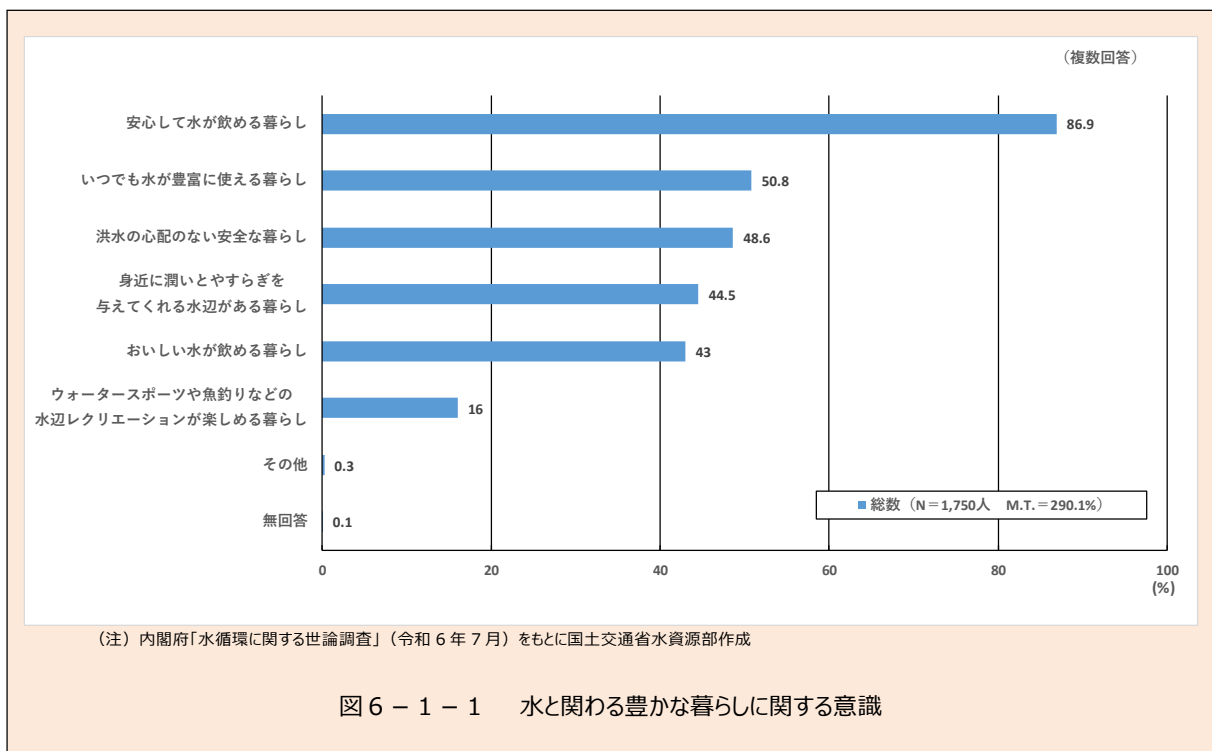
1 安全でおいしい水への要望

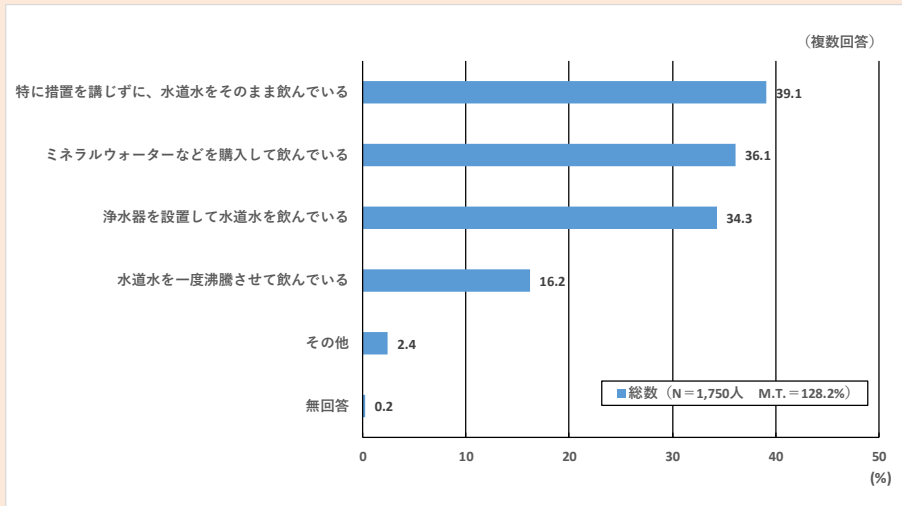
令和6年（2024年）に内閣府が実施した「水循環に関する世論調査」によると、水と関わる豊かな暮らしとは「安心して水が飲める暮らし」（86.9%）、「おいしい水が飲める暮らし」（43.0%）と安全な水やおいしい水への国民の関心がうかがえる（図6-1-1）。

また、この調査によると、普段の水の飲み方は「特に措置を講じずに、水道水をそのまま飲んでいる」とする人が39.1%と最も多かったが、その他「ミネラルウォーターなどを購入して飲んでいる」（36.1%）、「浄水器を設置して水道水を飲んでいる」（34.3%）とする人の順に多かった（図6-1-2）。水道水の質については41.3%の人が「飲み水以外の用途において満足している」もしくは「全ての用途において満足していない」と回答している（図6-1-3）。

近年は、ミネラルウォーターの市場拡大や浄水器の家庭への普及が進んでいる（参考6-1-1～4）。

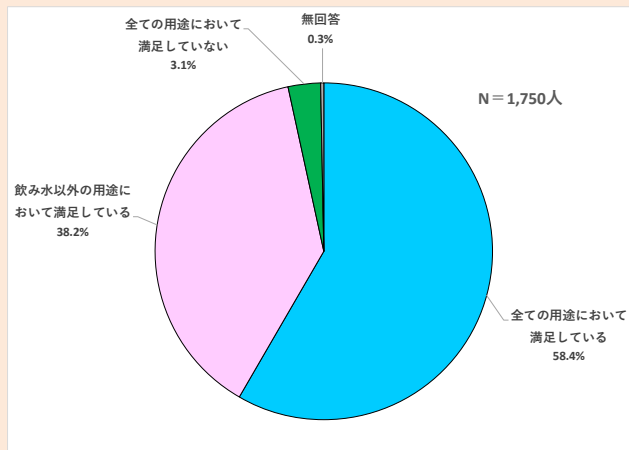
湖沼の富栄養化等の水源水質の悪化により、カビ臭等による異臭味障害対象人口は、平成2年度（1990年度）には約2,200万人に達したが、オゾン処理技術などの水の高度処理技術の導入や水質管理の向上等により改善傾向にあり、近年では概ね350万人以下で推移している。（図6-1-4）。





(注) 内閣府「水循環に関する世論調査」(令和6年7月)をもとに国土交通省水資源部作成

図6-1-2 普段の水の飲み方



(注) 内閣府「水循環に関する世論調査」(令和6年7月)をもとに国土交通省水資源部作成

図6-1-3 水道水の質に対する満足度

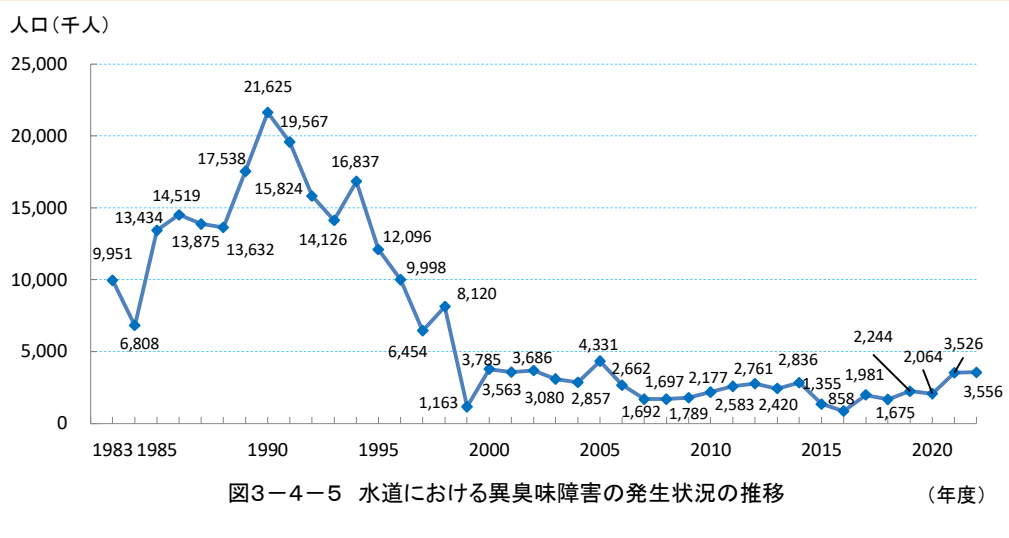


図3-4-5 水道における異臭味障害の発生状況の推移 (年度)

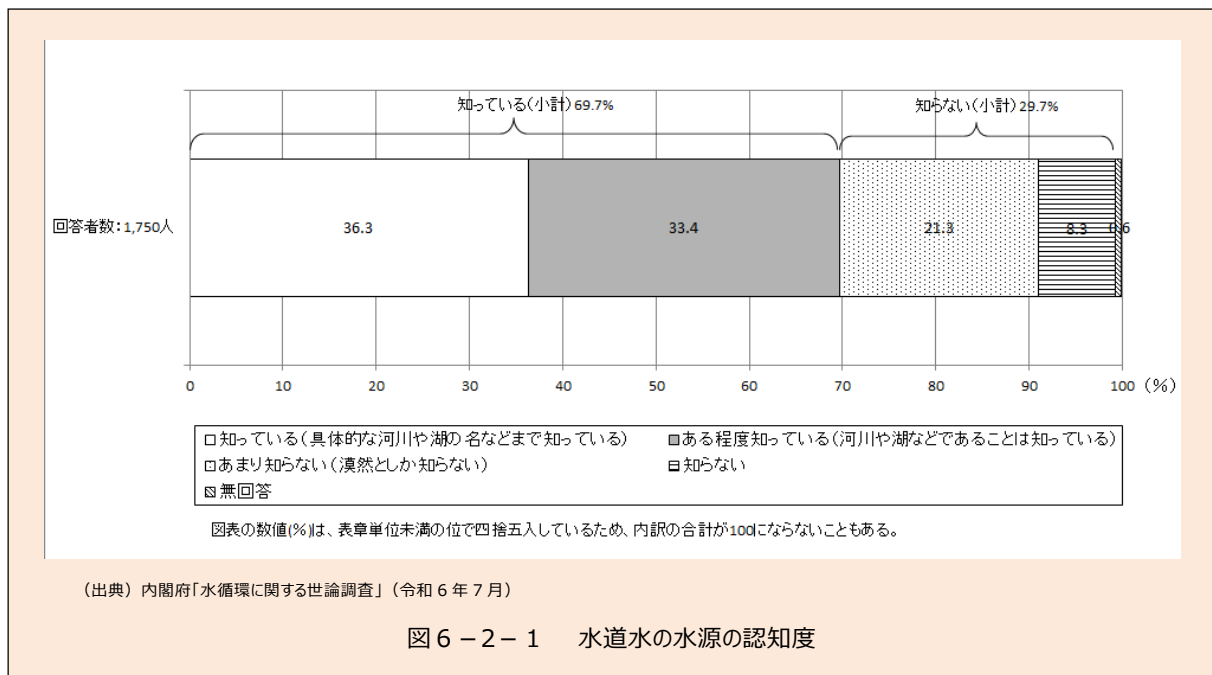
(注) 厚生労働省調べ

図6-1-4 水道における異臭味障害の発生状況の推移

2 水資源に関する意識

令和6年（2024年）に内閣府が実施した「水循環に関する世論調査」によると、水道水の水源の認知度を聞いた結果、約7割の人が「知っている」（「知っている（具体的な河川や湖の名などまで知っている）」36.3%と「ある程度知っている（河川や湖などであることは知っている）」33.4%との合計）と回答している（図6-2-1）。令和6年は「知っている」（「知っている（具体的な河川や湖の名などまで知っている）」と「ある程度知っている（河川や湖などであることは知っている）」との合計）が69.7%、「知らない」（「あまり知らない（漠然としか知らない）」と「知らない」との合計）が29.7%となっている（図6-2-2）。また、令和6年の同調査を年齢別に見ると、50～59歳以上の年齢階級では3割以上の人が「知っている」と回答しているのに対し、18歳～29歳では「知っている」と回答した人は約2割弱である（図6-2-3）。

平成26年（2014年）に内閣府が実施した「水循環に関する世論調査」によると普段の生活で節水しているかどうかを聞いた結果、「節水している」または「どちらかといえば節水している」と答えた人は80.5%である（図6-2-4、6-2-5）。「節水している」または「どちらかといえば節水している」と答えた人を男女別にみると、男性が78.8%、女性が81.9%と女性の方が高く、年齢別にみると70歳以上で85.3%である一方、20～29歳では71.0%と若い層の方が低くなっている（図6-2-6）。



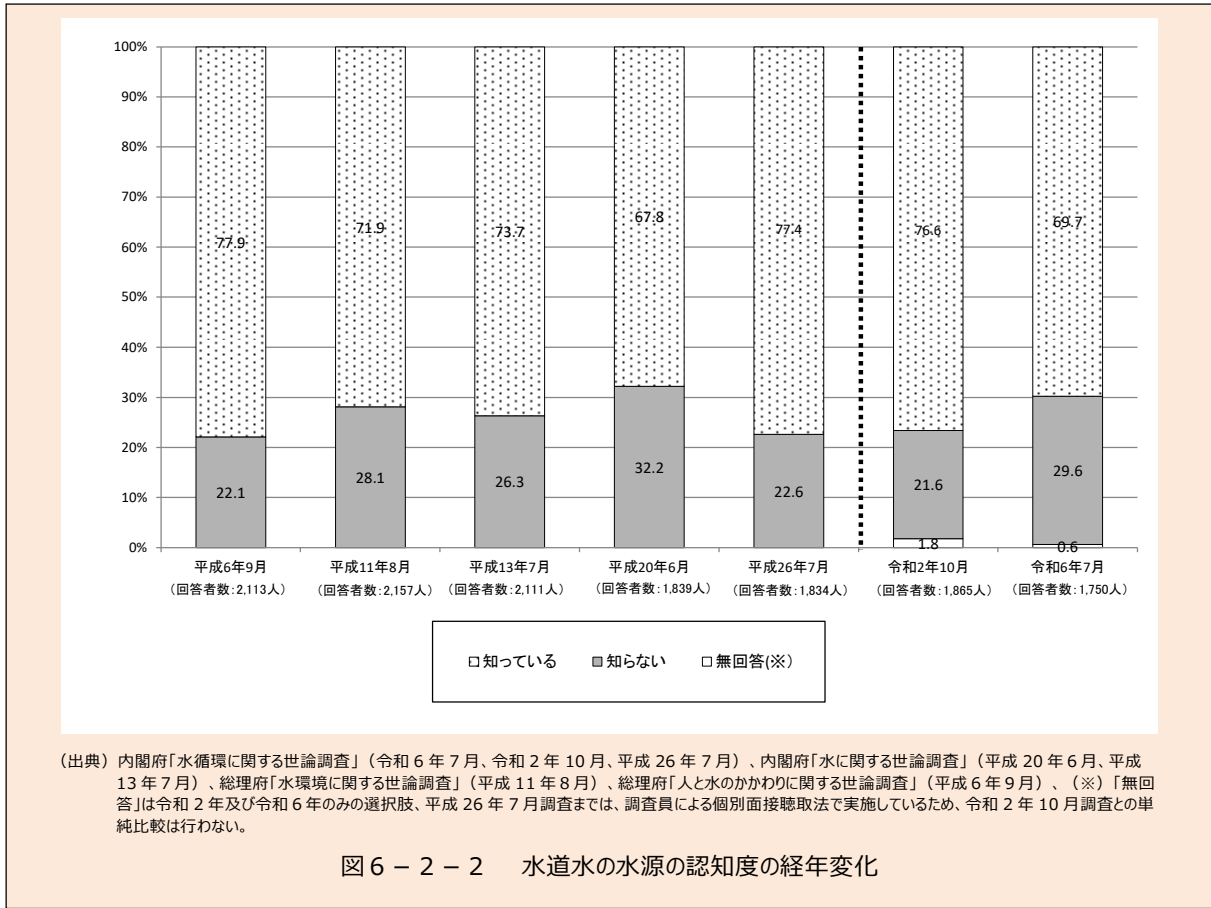


図6-2-2 水道水の水源の認知度の経年変化

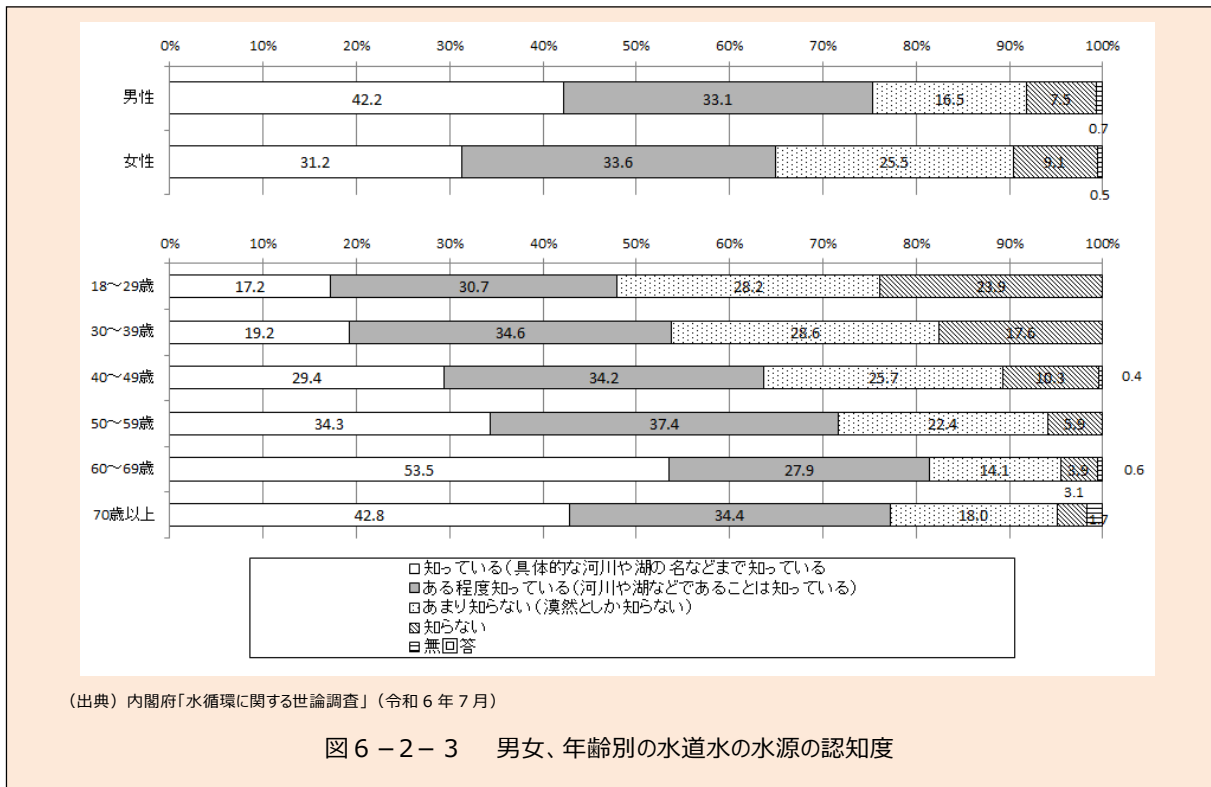


図6-2-3 男女、年齢別の水道水の水源の認知度

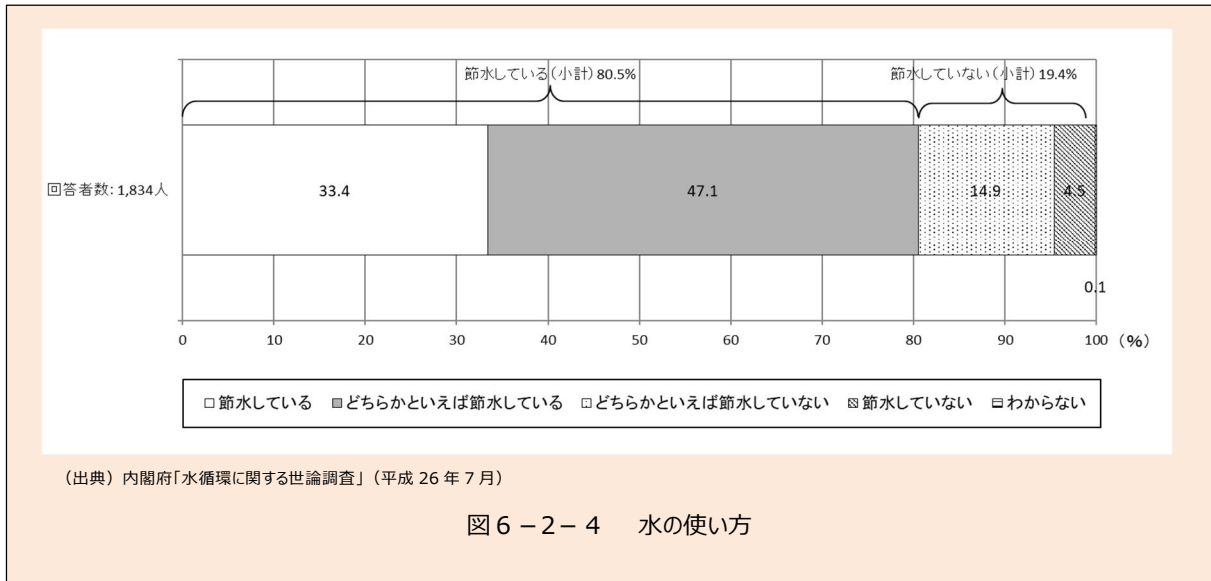


図6-2-4 水の使い方

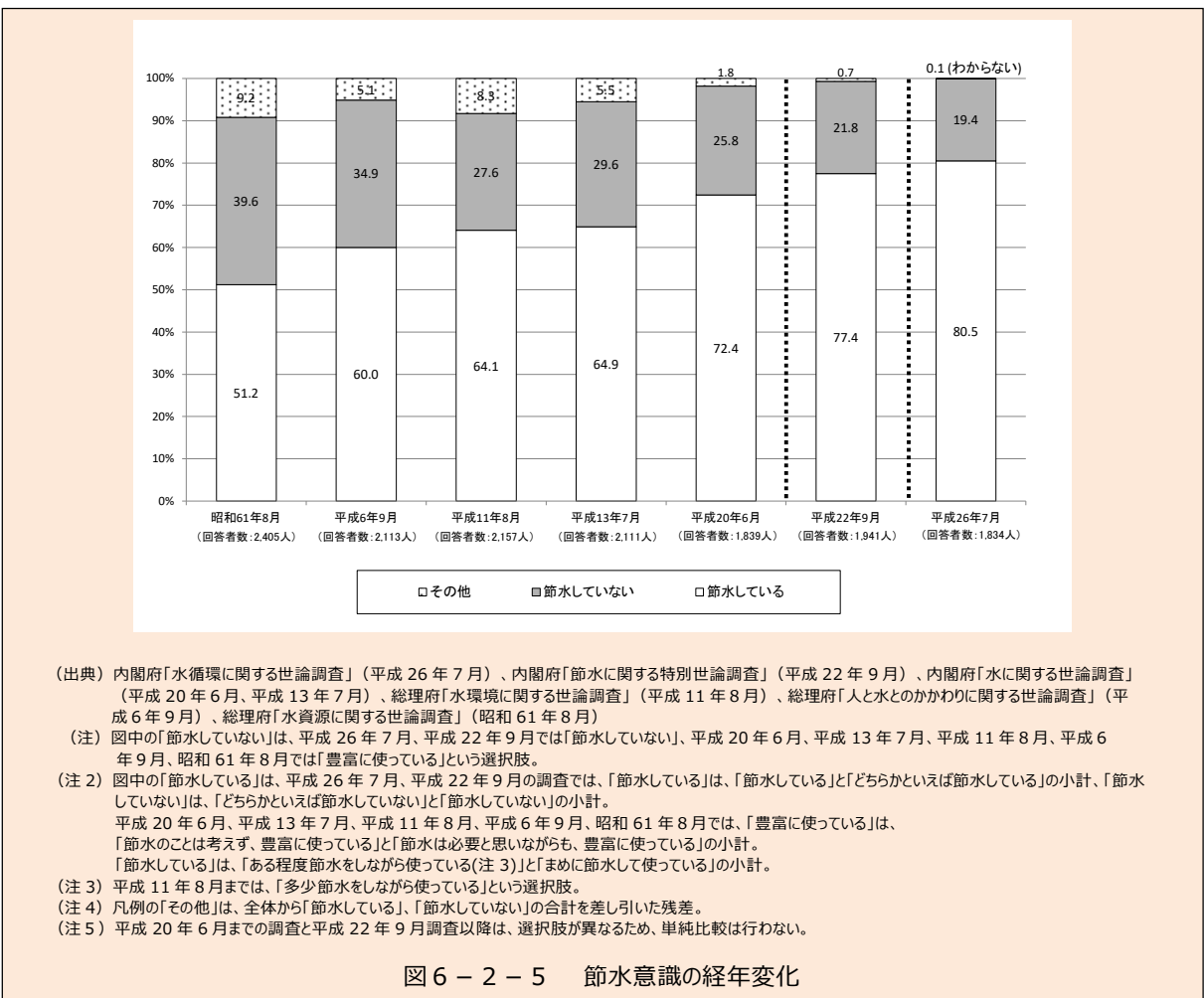


図6-2-5 節水意識の経年変化

